

エルサレムの神殿の「美しい門」のそばで物乞いをしていた、生まれてこの方40数年というもの歩いたことのなかった男に向かって、使徒ペトロとヨハネが「**ナザレの人イエス・キリストの名によって立ち上がり、歩きなさい**」と言って、彼を立ち上がらせると言う出来事が起こった。これに驚いたエルサレム神殿参詣の民衆が集まって来た。その民衆に向かって使徒ペトロが語った説教が、11節から26節までのいわゆる“神殿説教”と呼ばれる説教である。

長い説教であるが、2度の呼びかけを通して二つに分かれている。一つは、12節の「**イスラエルの人たち**」と呼びかけて16節まで続くもので、今行われた奇跡の解説である。つまり、十字架で殺された「**イエスの名**」がこの業を起こしたのだ、という説明。もう一つは、17節からで、「**ところで兄弟たち**」と呼びかけ最後の26節まで続く。ここでは、主イエスを十字架につけた罪から悔い改めて立ち帰るように、と勧める勧告である。

このペトロの神殿説教と2章の五旬節のペトロの説教とは著しい類似点が見られる。その類似点は、①まず民衆の中に起こっている誤解を解く。五旬節の時には「**ぶどう酒に酔っている**」のではないかという誤解。ここでは、ペトロたちが自分の「**力や信心**」でやったかのようにペトロたちを見ている間違いをたしなめる。②「**ナザレの人イエス・キリスト**」の復活と栄光、これが本当の原因であるということを詳しく論証している。③その主イエスを十字架につけた罪から立ち帰るようにと、懇々と勧める勧告。

但し、今回の説教の方が、“悔い改め”を勧める部分に重みが置かれている。

11節。「さて、その男がペトロとヨハネに付きまどっていると、民衆は皆非常に驚いて、『**ソロモンの回廊**』と呼ばれる所にいる彼らの方へ、一斉に集まって来た。」

「**ソロモンの回廊**」と呼ばれる場所は、エルサレム神殿の建物の外に「祭司に庭」「イスラエルの男子の庭」「イスラエルの婦人の庭」、そしてヘロデ大王が増設した広大な「異邦人の庭」という一番外側にある「異邦人の庭」の東寄りの壁に沿っている長さおよそ180メートル弱のところである(ヨセフス『ユダヤ古代史』20:221)。5章12節には、使徒たち「**一同は心を一つにしてソロモンの回廊に集まっていた**」と言われている。また、ヨハネによる福音書10章22節以下には、十字架に架かる前の主イエスがやはりこの「**ソロモンの回廊**」でユダヤ人たちと論争したことが記されている。

そのような思い出深い場所であるばかりではなく、男も女も外国人も集まれる「異邦人の庭」にある「**ソロモンの回廊**」は、初代のキリスト者たちが集会するには適していた場所ではないかと思われる。

12節. 「これを見たペトロは、民衆に言った。『イスラエルの人たち、なぜこのことに驚くのですか。また、わたしたちがまるで自分の力や信心によって、この人を歩かせたかのように、なぜ、わたしたちを見つめるのですか。』」

11節と12節に「民衆」という訳された言葉（λαὸς、ラオス）が出てくるが、これはただ一般大衆を表す言葉ではなく、イスラエル選民の民のことを表す言葉である。そして、ルカによる福音書では、指導者層と区別される形で用いられている。ルカ19章47-48節「毎日、イエスは境内で教えておられた。祭司長、律法学者、民の指導者たちは、イエスを殺そうと謀ったが、どうすることもできなかった。民衆が皆、夢中になってイエスの話に聞き入っていたからである。」

この民衆たちにペトロは、今回の出来事は「自分の力や信心による」のではない、と打ち消す。この先の8章9-10節には次のような言葉が記されている。

「ところで、この町に以前からシモンという人がいて、魔術を使ってサマリアの人々を驚かせ、偉大な人物と自称していた。それで、小さな者から大きな者に至るまで皆、『この人こそ偉大なものといわれる神の力だ』と言って注目していた。」

今ペトロは、“自分はそういう者ではない、「自分の力」ではない”と打ち消す。

更に「信心による」のでもない打ち消す。「信心」とは、ここでは一般的な「宗教生活」と言ってよい。彼を歩かせたのはペトロやヨハネたちの側の宗教心の篤さではない、そう打ち消している。そして13節で、本当の原因は、イスラエルの神の御業にある、とペトロはいう。

13節. 「アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神、わたしたちの先祖の神は、その僕イエスに栄光をお与えになりました。ところが、あなたがたはこのイエスを引き渡し、ピラトが釈放しようと決めていたのに、その面前でこの方を拒みました。」

ここでは「先祖の神」は、「僕イエスに」関連付けられている。ここから、ペトロが語る主イエスを描く様々な描写、称号が出てくる。これらはいずれも最初のエルサレムのキリスト教会で語られていた信仰と神学の貴重な資料である。

既に「ナザレの人イエス」という言い方があったが、ここで「僕イエス」という。更に4章27節「聖なる僕イエス」、3章14節「聖なる正しい方」、15節「命の導き手」などなど。

ここで「僕」と訳されている言葉は、例えば、パウロが「キリストは、神の身分でありながら、神と等しい者であることに固執しようとは思わず、かえって自分を無にして、僕の身分になり、人間と同じ者になられました」（フィリピの2:6-7）という「僕」は「奴隸」を表す「δοῦλος、デュロス」という言葉であるが、今日のところの「奴隸」と訳されている言葉は、「Παῖδα、パイダ」である。この「パイダ」は、「奴隸」という意味はなく、「実の息子」を表し（ヨハネ4:51）、場合によっては「若者」（使徒20:12）や「僕」も表す（ルカ7:7、15:26）。旧約聖書の“受難する主の僕の歌”という有名なところ（イザヤ52章13節-53章）で「主の僕」と言われてい

たもの。特に、今日のところでペトロが「先祖の神は、その僕イエスに栄光をお与えになりました」と語り出しているのは、イザヤ書52章の“主の僕の歌”の歌い出し「見よ、わたしの僕は栄える」(13節)という文章を実質上引用しているものである。神の御子キリストと受難の僕キリスト、このどちらも兼ねて表せるような表現である。

「聖者、聖なる方」は、これは、ガリラヤの会堂で悪霊に取りつかれた男が「ああ、ナザレのイエス、かまわないでくれ」、あなたは「神の聖者だ」というような時に使った呼び方で(ルカ4:34)、神様の特別な御用に取り分けられ遣わされている人物という意味。「導き手」と訳されている言葉(Ἀρχηγόν、アルケーゴン)は、ヘブライ人への手紙2章10節では「救いの創始者」と訳されている。また、12章2節では「信仰の創始者」と訳されている。これらから分かるように、ただ「導き手」とか「ガイド」という、“先に立って歩く”だけでなく、むしろ命を生み出す、あるいは救いを創り出す、そういう「源」であり「創始者」であり「作者」であるという意味を持つ表現である。

今日のところで「命」と言われているのは、先ほどのヘブライ人への手紙2章10節で「救いの創始者」と言い換えてあったように、「救い、永遠の命」という意味である。

このような独特な数々の称号で呼び表されたイエス・キリスト、これと「あなたがた」との関わりが13節後半から語られている。

13節後半—15節。「ところが、あなたがたはこのイエスを引き渡し、ピラトが釈放しようとしていたのに、その面前でこの方を拒みました。聖なる正しい方を拒んで、人殺しの男を赦すように要求したのです。あなたがたは、命への導き手である方を殺してしまいましたが、神はこの方を死者の中から復活させてくださいました。わたしたちは、このことの証人です。」

このように、次々と対比を積み重ねて、エルサレムのユダヤ人たちが何という大変な罪を犯したかということ、えぐり出す。同時に主イエスの死が身代わりの死であることを明らかにする。

16節。「あなたがたの見て知っているこの人を、イエスの名が強くしました。それは、その名を信じる信仰によるものです。イエスによる信仰が、あなたがた一同の前でこの人を完全にいやしたのです。」

ここでやっと、皆の前で起こったこの出来事の本当の原因説明がされる。ここでペトロは、男を強くしたのは復活した「イエス・キリストの名」である、ペトロたちの力ではない。このことを第一点目として語っている。次に、「イエスによる信仰」が、彼に「完全ないやし」を与えたと言って、「信仰」が関わっていることを語っている。その「信仰」は、決してこの男の心の産物ではなくて、「信仰」そのものが「イエスによる」ところのものだ、つまり主イエスによって起こされる新しい思いな

のだ、こう語る。主イエスを信じる信仰を、主イエスご自身がその男に与えた、と。

ではここでいう「信仰」とはどういうものか。前回の10節で「**施しを乞うて**」の「**施し**」訳されている言葉（ἐλεημοσύνην、エレエーモスネーン）は、「**施し**」の他に「**憐れみ**」という意味も持っている。これと元が同じ言葉を使ってルカはその福音書の18章の終わりで盲人が見えるようになった奇跡を記している。

ルカによる福音書18章の終わりに、エリコの町で盲人が物乞いをしている、そこへ「**ナザレのイエスのお通りだ**」ということを知ると、「**ダビデの子よ、わたしを憐れんでください**」（38節）と叫ぶ。その時、主イエスは、「**何をして欲しいのか**」とお尋ねになると、金や銀ではなく、「目を開けていただきたい」と盲人は「**憐れみ**」（ἐλέησον、エレエーソン）を乞うたのである。

それと同じことがこの「**美しい門**」の傍らで起こったと思われる。「**憐れみを乞うた**」のである。その「**憐れみ**」とは、他の人からねだる金銭ではない、ペトロもそんなものでないということが分かっている。もっとよいものをあげる。「**ナザレの人イエス・キリスト名によって立って歩け**」、こう言われたので彼は立った。これが「**憐れみ**」である。

その男は何かもらえると「**思って一期待して一見つめていると**」と、そうルカは書いている。「**憐れんでください**」と言ったその憐れみ、どういう憐れみをもたらえるのかと「**期待して見つめていた**」。この「**期待**」は、まだ本当の「**信仰**」とは呼べないほどかすかな心であったかも知れないけれど、でも、神の憐れみに対する「**期待**」である。信仰的な「**期待**」である。

今日の話とほぼそっくりな話がこの後14章8節以下に出てくる（～10節）。

「**リストラに、足の不自由な男が座っていた。生まれつき足が悪く、まだ一度も歩いたことがなかった。この人が、パウロの話すのを聞いていた。パウロは彼を見つめ、いやされるのにふさわしい信仰があるのを認め、『自分の足でまっすぐに立ちなさい』と大声で言った。すると、その人は躍り上がって歩きだした。』**

ペトロとヨハネも「**見つめ**」た。パウロも「**見つめた**」。彼らは一体そこで何を見ているのか。この男に「**いやされるのにふさわしい信仰がある**」かどうか、救われるほどの「**信仰**」があるかどうか、これを見ていたのである。まだ本当の信仰と呼ぶには値しないほどの「**期待**」だったかもしれない。でもそれはやはりイエスの名を信じる「**信仰**」だ。それが彼を立たせた。そう言わなければならないだろう。

エルサレムのユダヤ人たちが十字架につけたナザレの人イエスは「**命の導き手**」であられる。復活して、今も生きて働いておられる。憐れみを受けることによってしか生きていけない者にとって、どんな憐れみをいただけるかという信仰的な期待を、この「**信仰の創始者**」である主イエスは心の中に起こさせる。その期待を、「**イエスの名を信じる信仰**」へと育ててくださる。そして、その信仰によって、「**完全な治癒**」というか「**完全な健康**」、健やかな人間に立たせてくださる。

*本日をもって聖書研究祈禱会は休みに入ります。次回は2023年1月19日です。